

## 河北潟干拓地における農業

山下 和歌子

我が国は、戦後の復興期であった昭和21年、22年に多くの国営干拓地の造成に着工した。当時、食糧不足は深刻な問題で、この問題を解決することこそが疲弊しきった国力を解決する唯一の手段と考えられていたのだ。

河北潟周辺は、1646年の記録を最古のものとし、加賀藩の時代を通じて常に干拓、埋め立て要地と目されてきた。しかし、周辺集落は漁村でもあったため、漁民とのあつれきがあり失敗に終わった計画もあった。その中では、銭屋五兵衛の銭五開きがもっとも名高い。

この干拓、埋め立ては明治、大正、昭和と一貫して計画され、一部は実行もされてきた。そして遂に大規模計画として実を結んだのが1963年のことであった。しかし、当初水田になる予定だった当干拓地は、昭和40年代からの米事情の変化に伴う減反政策の影響を受けて、開田抑制策から、昭和52年開畑へと計画変更になった。干拓地という土地柄、畑にするため排水計画を中心に、工事計画が変更され、当初9年で完工の予定が23年もの長い年月を費やし、昭和60年度ようやく事業完了をみた。しかし、当然入植、増反配分を終えて事業完了すべき入植分243ha、増反分860haのうち、増反分約190haが未配分のままであった。この未配分地は現在、増反希望者がある一方で辞退者が出ていたため、240haにのぼり、県の農地開発公社で順次募集を行っている状態である。また、排水改良事業としての暗渠排水事業が県営で続けられ、完成は平成2年度の予定で、未完成のままの営農開始となってしまった。

このように順調なスタートをきったとはいえない干拓地であるが、それは干拓地が行政的に属する周辺地域の金沢市、津幡町、宇ノ気町、内灘町の農業を考えればいたしかたのないこととも言える。この地域は水田地帯であり、稲作に大きく偏った農業地域なのである。経営耕地に占める田の割合は、砂丘が80%を占める内灘以外は、80%前後であり、このような地域から増反した農家の多くは、畑作未経験者だったわけである。増反以

前は、米以外は作ったことのない者が多く、技術的にも問題があったが、米という価格の安定した作物に慣れている者にとっては、保障がない野菜作りや、米と比べて価格に差がある麦類や大豆に踏みきるのは容易なことではなかった。それでも、大規模に農業を行うにはもはや干拓地以外には土地はないため、増反したのであるが、野菜の作付面積250haという目標はなかなか達成されない。やはり、どうしても穀類に偏ってしまうのである。それでもようやく昭和60年頃から野菜の作付が250haには程遠いが、180~190haに安定し始め、主作目もすいか、れんこん、大根、キャベツ、白菜が定着してきた。この作目を見る限り、すいかと秋冬作物という営農類型が固定してきたとっていいだろう。

このようによく定着してきた野菜作りであるが、干拓地の畑作の中で最も順調な生産を上げ、市場の信頼も得ているものにれんこんがある。れんこんはもともと加賀れんこんの産地である干拓地から近い小坂地区からの増反者がほとんどであったため、技術的にも問題がなかったことも大きな理由であるが、れんこん生産組合で取られていた経営方式によるところが大きかったと思う。この経営方式は平成2年6月に終了したが、れんこん畑を組合員で共有し、全ての作付過程から出荷までを班編成で行い、会社のような給料制を取っていた。このように組合で足並みを揃えたことが、農地としての安定、拡大、市場の開拓、確保、といったことに大きく寄与したと思う。

また、すいかが主作目になったのも、すいか部分に属する生産者が、自主的に作付面積の計画を立てて、安定量を出荷したことが結果として認められるようになったのではないだろうか。

このように、干拓地は穀類偏重から徐々に脱却し、野菜の主作目も決まり、安定生産を始めたといえる。今後はすいかに続く作物の開拓、定着を図り、更に野菜作付面積を伸ばす方向で進んでいくことが望ましいと思う。